Tsukuba Psychological Research
1991, **13**, 113-119

援助行動に影響を及ぼす性格特性の総合的検討

筑波大学心理学系　山際勇一郎

筑波大学心理学系　堀　　洋道[1)]

A general analysis of relation of personality characteristics and helping behaviors.

Yuichiro Yamagiwa
Hiromichi Hori
(Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan)

A sample of 326 college subjects were requested to answer the questions to investigate what characteristics always have influence on diverse helping behaviors. Twenty characteristics and 21 helping behaviors were rearranged to 14 characteristics and 20 helping behaviors by item analysis. Results of correlation analysis indicated that affiliation, orientaion for service occpupation, social extraversion and empathy were related with about all helping behaviors, but unlike the results of previous studies, latitude, authoritarianism and political conservatism were not related with any behavior in this study.

Key words: helping behavior, personality characteristics and behavior

今までの研究を概観すると，援助行動を規定している要因は，傍観者の有無や事態のあいまい性などの状況要因，性格特性や地位などの援助者の個人的要因，性別，援助の要請の仕方などの被援助者の個人的要因，そして規範や慣習などの文化・社会的要因などにわけられる．本研究では性格特性が援助行動に及ぼす影響について検討をおこなう．

さて，初期の援助行動研究であるLatané & Darley (1970) においては，取り上げられている変数は上述したように分類，整理されているわけではないが，これらの要因に含まれる変数が数多く取り上げられており，その後の多くの援助行動研究を生むきっかけとなっている．しかし，1980年頃までの研究では，扱われた援助行動の内容が各研究によって様々であったために，結果に一致が見られないものがある．たとえば，権威主義的傾向と援助行動の関連についてはLatené & Darleyは関連がないとしているが，Friedrichs (1960) は関連を見だしている．この2つの研究結果が一致していないのは，前者が緊急場面を用いた実験室実験であったのに対し，後者は質問紙を用いた一般的援助傾向を問題に取り上げており，援助行動の内容が異なっているからだと考えられる．このような問題に対して最近では，要因を個別に取り上げるのではなく総合的に検討するメタ分析などもみられるようになってきている．本研究においても，性格特性と個々に状況要因である援助行動の内容との関連を取り上げるのではなく，総合的に検討することを試みる．

援助行動の内容については，生死にかかわるような救けを求められている場面の行動と赤い羽根の寄付行動が異質であることが明らかであるように，援助行動の分類，体系化の必要性がいわれてきた（例えば，Staub, 1979)．そして，高木 (1982) やAmato & Pearce (1983) によって類型化の試みが行われている．これらの研究では非常に多くの援助場面を提示し，それらがどの程度類似しているかを尋ね，クラスター分析法や多次元尺度構成法などの多変量解析法を用いて，援助状況の基本的次元が検討されている．

1) 本研究の調査などの実施にあたり人間学類土井祥子さんの協力を得た．ここに感謝の意を表す．

このような多様な援助要因に対して，性格特性については，竹村（1987）が援助行動の規定因としての性格特性の問題で取り上げているように，何らかの援助を起こす人に特徴的な性格特性は何か，または，一貫して援助的な性格特性というものは存在するのかということが問題となっている．この問題に対して本研究では，多くの性格特性変数と多くの援助行動を用意し，両者の関連を見ることによって，どの援助場面にも一貫して効果を示す援助的性格特性が存在するのかを総合的に検討する．

援助者の個人的要因は，人種，性別，年齢などの人口統計学的変数と権威主義的傾向や共感性などの性格特性に大別されるが，本研究では性格特性を取り上げる．前述したように，性格特性が援助行動の規定因であるかどうかについては見解が一致していない．Latané & Darleyは，権威主義的傾向，他者による承認への要求，マキャヴェリズム，疎外感，社会的責任の自覚の5つの性格特性と緊急事態における援助行動の生起との関連を調べ，援助行動と性格特性との一貫した関係について否定的な意見をのべている．その理由として，緊急事態ではその状況の持つ圧力が非常に強いために性格特性の作用する余地が非常に少ないこと，また，援助の過程においてその諸段階で性格特性が背反する方向に働く可能性があることをあげている．Latané & Darleyの見解は示唆に富むものの緊急場面での援助行動に限られていると考えられる．

一方，援助行動と性格特性との関連を報告している研究も多い．援助傾向を他者が評定する方法を採用している研究では，援助傾向と関連のある性格特性として，情緒安定性，社会的適応性（Turner, 1948）16PFによる社会的外向性（Catter & Horowitz, 1952），EPPSの養護および自立への要求（MacDonald, 1966），政治的保守性，権威主義的傾向（Friedrichs）が報告されている．自分の行動予想を自記回答する方法を用いたものでは，EPPSの持久，親和，他者認知への要求（Rival, 1963），奉仕的職業志向（Sawyer, 1966），また，負の関連のある特性には心理的都市化傾向（中村，1982）がある．さらに，援助行動を実際に行う機会を与える方法を用いたものでは，寛大さ，非攻撃性（Ruthefold & Mussen, 1968），内的統制型（Gore & Rotter, 1963），共感性（Mehrabian & Epstein, 1972）などが報告されている．なお，厳密には性格特性ではなく，態度に属するものであるが，個人に内在化されている規範も援助行動に及ぼす重要因として考えられる．社会的責任規範（Berkowitz & Conner, 1966），互恵規範（Pruitt, 1968），衡平規範（Wilke & Lanzetta, 1970）などが援助行動に影響を与えるとされている．

これらの性格特性のうち，あらゆる援助場面に常に一貫して援助行動に影響を与えていることを示すものはない．状況によって効果が現れたり現れなかったりする．しかしながら，逆の方向に作用するという知見はなく，状況あるいは援助内容との相互作用として効果が生じると考えるのが妥当であろう．したがって，状況を何らかの方法で分類・整理することによって性格特性の援助行動に対する効果が明らかとなると思われる．そのための状況の類型化については，用いられたエピソードの数も100を越えていること，日本人を対象者としていることなどから前述した高木による7類型－寄付・奉仕行動，分与行動，緊急事態における援助行動，努力を必要とする援助行動，迷子や遺失者（物を失った人）に対する援助行動，社会的弱者に対する援助行動，小さな親切行動－が適当と思われる．この7類型を用いていくつかの援助場面を分類しながら前述した性格特性との関連を検討する．

方　法

本研究で取り上げる性格特性は前述の先行研究によって援助行動に何らかの影響があると報告されているものである．しかし，1つの性格特性を測定するために当該の先行研究と全く同様な測定を用いることは多くの点で適当でなく，また不可能である．そこで，本研究では性格特性の測定はすべて自記回答による評定尺度法を用いた．また，各性格特性間の関連があると援助行動との関連を吟味する際に複雑になるということと項目数が多いと対象者の負担が大きいということから予備調査として性格特性の整理をおこなった．

予備調査

大学生185名（男82名，女103名）を対象者として講義時間に一斉に調査を実施した．用意した性格特性尺度は25，合計100項目であり，各質問項目は先行研究において用いられたものとできるだけ同じものを用意し，どのような項目が使用されたか明らかでない場合には標準化された既存の尺度を用いた．既存の標準化尺度もない場合はあらたに項目を作成した．扱われた性格特性は20尺度－EPPSより自律，親和，他者認知，養護，持久および攻撃の6尺度，16PFより情緒安定性，中村（1982）から心理都市化傾向，YG検査から社会的適応性と社会的外向性の2尺度，藤永（1984）のF尺度，Levenson（1981）のI,P & C Scaleのうち内的統制型尺度，questionnaire measure of empathic tendencyの共感性，職業

興味テストから奉仕的職業志向，カリフォルニア人格検査より寛容性，また，その他の政治的保守性，ゆとり，社会的責任規範，互恵規範，衡平規範は自作ーであった．すべて，4点評定尺度であった．これらの項目について主因子法バリマックス回転による因子分析をおこなった．固有値1.00以上の因子（累積寄与率68.7％）を採用した．その結果16の因子ー親和と養護因子，社会的外向性因子，他者認知欲求子，奉仕的職業志向因子，持久因子，攻撃欲求因子，自律因子，懐疑性因子，自信家因子，内的統制型因子，権威主義的因子，互恵規範因子，社会的責任規範因子，政治的保守性因子，衡平規範因子ーがまとまりがよかったため，本研究ではこれらを性格特性として援助行動との関連を検討することとした．

本調査

大学生326名（男162名，女164名）を対象者として講義時間の一斉回答法および宿舎への留置法をおこなった．どちらも無記名式であった．

性格特性の尺度は予備調査で抽出された16因子の尺度項目を用いたが，予備調査での因子分析で排除された共感性の尺度を追加した．これは，援助行動に共感性が影響することを示す研究が多いためであり，本研究においてもその必要があると判断したからである．本調査においては予備調査で用いたMehrabian & Epsteinを日本人向けに改訂した加藤・高木（1980）の共感性尺度から，3項目を用いた．

援助項目は高木の7類型をもとにして，各類型について3項目を作成した．

結　果

平均値および標準偏差から，極端な分布を示した性格特性の7項目と援助行動の1項目の計8項目を分析から除いた．次に，予備調査と同じように各性格特性間に関連があると援助行動との関連を吟味する際に複雑になるという理由から項目の整理のために主因子法バリマックス回転の因子分析をおこなった．固有値1.00以上（累積寄与率60.8％）の15因子を採用した（Table 1）．第11因子，第14因子と第15因子は，負荷量の高い項目に意味が見いだせなかったため分析から除くこととした．抽出された因子は規範の因子が消えた点を除いて予備調査とほぼ同じであった．また，共感性については，もともと使用した加藤・高木の3項目は3つの因子からの代表であったため，ここでの因子分析においても1因子としてまとまらなかったと考えられる．よって，因子分析の結果と独立して性格特性得点を算出した．また，自信家・ゆとり因子は，もともと2つの尺度であったため，性格特性としても2つに分けることにした．最終的に援助場面との関連を検討する性格特性は14となった．

各性格特性と各援助場面との相関係数をTable 2に示した．どの援助場面にも共通して関連のあったのは親和であった．24時間の不眠不休実験への参加と写真をとる，の2つを除く援助場面に正の相関があり，他の性格特性のものと比較して一貫して値が高かった．次に，奉仕的職業志向，社会的外向性，内的統制型が半数以上の援助場面と正の相関を示した．また，共感性も半数以上の援助場面と有意な相関が見られたが，値はどれも小さかった．どの援助場面とも全く相関がなかったのが，ゆとり，権威主義，政治的保守性であり，自信家や攻撃，他者認知なども相関のある援助行動はほとんどなかった．この傾向は7類型でも同様であった（Table 3）．個々の援助場面の結果と同じように，多くの類型に共通して相関があったのは，親和，奉仕的職業志向，社会的外向性，内的統制型，共感性であった．特に，親和は値も高かった．共感性は5つの類型と有意であったが値は小さかった．ゆとり，自信家，権威主義，自律，攻撃，政治的保守性は各類型と相関がなかった．

つぎに，性格特性と援助行動の関連を一括して検討するため，正準相関分析をおこなった．援助行動は7類型を使用した．1％水準で有意な正準相関係数が1つと有意傾向の正準相関係数が得られた（Table 4）．第1正準変量への負荷の高い性格特性は親和，社会的外向性，奉仕的職業志向，共感性であり，負であったが懐疑性も高かった．援助行動はどの援助行動も第1正準変量への負荷が高かった．特に親和の負荷が.747と高かった．

考　察

援助行動の規定因としての性格特性の問題として何らかの援助を起こす人に特徴的な性格特性は何か，または，一貫して援助的な性格特性というものは存在するのかということについて，相関係数と正準相関分析の結果から，援助的な性格特性は親和，奉仕的職業志向，社会的外向性，共感性であると結論づけることができよう．特に，親和傾向が援助行動と非常に関連があり，これが援助的性格特性の中心であると考えられる．ただし，奉仕的職業志向は直交回転の因子分析をおこなっているので親和などの性格特性と独立していると考えられるものの，単一の，しかも性格特性と考えてよいのか疑問が残る．

Table 1 本調査性格特性質問項目の因子分析結果

	質問項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8	因子9	因子10	因子11	因子12	因子13	因子14	因子15
奉仕的職業指向	電話の受付や人の用事をする仕事をしたい	.848														
	お客や患者の受付をする仕事をしたい	.758														
	運動会等で受付や人の案内の仕事をしたい	.695														
社会的外向性	誰とでもよく話す		.776													
	無口である*		.769													
	こちらから進んで友達を作ることが少ない*		.730													
持久	やり始めた仕事は終わりまでやりとげたい			.885												
	やりかけた仕事は一生懸命やりたい			.745												
	問題を解くとき最後まで頑張りたい			.554												
他者認知	他人の感情や動機を分析してみたい				.904											
	人の行動を調べて分析したい				.787											
	自分の動機や感情を分析してみたい				.601											
自信家・ゆとり	私は友人が動揺しても自分までは動揺しない					.562										
	周囲が騒がしくても大抵の仕事は集中できる					.364	-.327									
	立てた仕事の計画は実現させる自信がある					.338										
	何かに熱中すると他のことに目がいかない					-.262										
	私の気分は周囲の人にとても影響される*					-.401										
	やるべき仕事が重なると慌ててしまう*					-.485										
権威主義	悪い血統の人は節度ある人とやっていけない						.549									
	権威に対する服従と尊敬を子供は学ぶべきだ						.426									
	人のつきあいはgive & takeを等しくすべきだ*						.397									
	健全な人は親しい人を傷つけようと考えない*						.328									
懐疑性	他人をやたらに信用しずぎてはいけない							.615								
	この世では自分しか信ずるものがない							.539								
	人が嬉しくて泣くのを見るとしらける							.258								
自律	自分の思い通りに行動できるようになりたい								.665							
	人の考えに拘らず自分の考え通りにしたい								.561							
内的統制型	思い通りの結果は私が努力した時得られる									.671						
	私の人生は私自身の日常の行動で決まる									.540						
	人生に何が起こるかは自分の力で決められる									.355						
親和	友達とものをわけあうことが好きである										.509					
	友達のためになることをしたい			.306							.459					
	人の役に立つことは進んですべきだ	.306									.340					
	物を頂いたお礼はその物とほぼ同額がよい											.684				
	自分の恩人のことを悪く言うべきではない											.365				
	私と同程度の知識量の「専門家」によくあう											-.314				
攻撃	都合が悪くなると他の人を責めたくなる												.701			
	まぬけなことをする人をからかいたくなる												.416			
	自分と反対の意見の人を攻撃したい												.390		-.343	
政保治守的性	現行の政治体制はもはや限界にきている													.620		
	争点の解決のために政治体制の変更が必要だ													.526		
	自分を頼ってくる者を無視すべきではない														.386	
	人に物を借りたらお礼をすべきだ															.409
	人が見ていないと大抵の人は怠けると思う															-.365

注）因子11，14，15は命名せず．表中の数値は±.300以上の因子負荷量．*：逆転項目

Table 2 各援助場面と各性格特性との関係

	奉仕的職業志向	社会的外向性	持久	他者認知	自信家	ゆとり	権威主義	懐疑性	自律	内的統制型	親和	攻撃	政治的保守性	共感性
共同募金	.163	.203	.172					.332		.145	.220			.161
15分間の実験への参加	.182		.151	.239	.146						.207			
財布を落とした人への援助								.151		.161	.193			
筆記用具を忘れた人への援助											.241			.170
珍しい食べ物のおすそわけ	.206	.239		.161				.174			.324			.196
交通事故への介入								.174			.324			
電車内での他人の卒倒		.219	.179						.184	.148	.289			.110
階段を踏み外した人への援助	.198	.336	.145					.198		.170	.339			.150
引越の手伝い	.173	.206						-.278		.187	.296			.189
エンジンのおしかけ	.172	.189						-.171		.175	.296			.153
24時間不眠不休実験への参加														
コンタクトレンズを探す	.205	.260	.210					-.196			.357			.172
迷子への援助	.228	.223	.169					-.176			.287	-.149		
財布を交番に届ける	.169		.175								.247			
身体の不自由な人への援助	.238	.233									.235			.173
電車でお年寄りに席を譲る											.263			
棚上の物を取る子供への援助	.158	.169	.150							.166	.193			.144
ドアを開けてやる		.184								.173	.237			.174
落ちた書類を集めてやる											.235			
旅行者の写真をとる	.225	.192								.199				.148

表内の数値は相関係数(N=326, p<.01)

Table 3 高木（1982）の援助場面の各類型と各性格特性との関係

	奉仕的職業志向	社会的外向性	持久	他者認知	自信家	ゆとり	権威主義	懐疑性	自律	内的統制型	親和	攻撃	政治的保守性	共感性
寄付・奉仕	.221	.181	.205	.213				-.263			.271			
分与	.215	.209	.161	.156				-.220		.174	.364			.211
緊急事態	.167	.284	.178					-.147	.216	.196	.342			
努力を要する援助	.191	.175						-.235		.223	.298			.150
迷子等への援助	.272	.252	.250		.152			-.225		.161	.401	-.171		.149
社会的弱者への援助	.224	.229	.156							.207	.302			.164
小さな親切	.226	.205								.200	.285			.187

表内の数値は相関係数(N=326, p<.01)

また，先行研究では関連性が見いだされていながら，本研究では持久，ゆとり，権威主義，攻撃などに関連が見られなかった．特に，ゆとり，権威主義，政治的保守性はどの分析においても関連がなかった．したがって，これらの性格特性は援助行動と関連がないと考えてよいだろう．その他の性格特性はいくつかの援助場面と有意な相関があったが，どの援助場面にも効果があるというものではなく，場面によって効果が異なると考えられる．

本研究の結果から，一貫して援助行動に影響を与える性格特性と場面によって効果を持つ性格特性と全く関連のない性格特性がそれぞれ存在することが明らかとなった．親和，社会的外向性，共感性などが一貫して効果のある性格特性であり，これらの複合体が援助的性格特性と捉えられることができるであろう．

ところで，3つの規範は援助行動との関連を検討することができなかった．厳密には性格特性ではないためとも考えられるが，もともとこれらの規範は相手に親切にされたときに親切にする，あるいは頼られたら援助してやらなければならないというような相手の存在や相手の行為を仮定した性質のものである．したがって，本研究で用いた自記回答法による調査では規範と援助行動の関連の検討を完全にはおこなうことができなかったように思われる．この点は今後の課題であろう．

また，測定方法に関連する問題として社会的望ましさがあげられる．援助行動のような性質の行動を測定する際にはかならず社会的望ましさが生じないような方策をとらなければならないが，特に，質問紙法では難しい問題である．本研究において親和，社会的外向性，共感などと援助行動との関連が見られたのも，援助行動に社会的望ましさが加わっていたためかもしれない．援助するということは社会的に望ましいことであるため，測定しているのが実際にその個人の行動傾向ではなくそうあればよいという望ましさにすぎないかもしれない．援助行動の検討に質問紙法を用いることの限界を常に考慮してお

Table 4 7類型と性格特性との正準相関分析

性格特性	正準変量1	正準変量2
奉仕的職業志向	.488	.036
社会的外向性	.521	.263
持久	.457	-.205
他者認知	.274	-.237
自信家	.281	-.300
ゆとり	.011	.310
権威主義	-.130	.322
懐疑性	-.470	.206
自律	.180	.168
内的統制型	.378	.387
親和	.747	.176
攻撃	-.238	.069
政治的保守性	-.134	.235
共感性	.463	.293
寄与率	.142	.064
冗長性係数	.052	.008
援助場面	**正準変量1**	**正準変量2**
寄付・奉仕	.706	-.415
分与	.714	.219
緊急事態	.728	.354
努力を要する援助	.588	.194
迷子等への援助	.829	.022
社会的弱者への援助	.613	.322
小さな親切	.548	.601
寄与率	.464	.121
冗長性係数	.178	.016
正準相関係数	.383	.131

かなければならないだろう．Krebs (1970) は，援助行動と性格特性の関連についてレビューし，その測定方法によって研究を整理している．それは研究方法によって固有の問題があるからである．本研究において検討した性格特性は先行研究によって効果があるとされたものであったが，自記回答方法の結果だけではなく他者による評定や実際の行為の観察によるものなど様々であった．結果として親和や共感性などが効果をもち，ゆとりや権威主義傾向などが関連がなかったが，測定方法によっては効果を持つ可能性を否定できない．このように，規範の問題，社会的望ましさの問題など今後の援助行動研究においてはその測定方法に関する問題をどのように解決していくかが大きな課題であろう．

引用文献

Amato,P.R. & Pearce,P. 1982 A cognitively-based taxonomy of helping. In Smithson,M. et al. (Eds.): *Dimensions of helping behaviour.* Pergamon Press.

Berkowitz,L. & Conner,W.H. 1966 Success, failure, and social responsibility, *Journal of Personality and Social Psychology,* **4**, 664-669.

Cattel, R. & Horowitz, J. 1952 Objective personality tests investigating the structure of altruism in relation to souce traits. A. H., and L. *Journal of Personality,* **51**, 103-117.

Friedrichs, R. W. 1960 Alter versus ego. *American Sociological Review,* **25**, 496-508.

藤永保 1984 思想と人格 河合隼雄(編) 講座現代の心理学6 性格の科学 小学館

Gore, P. & Rotter, J. B. 1963 A personality correlate of social action. *Journal of Personality,* **31**, 58-64.

加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の性質 筑波大学心理学研究, **2**, 33-42.

Krebs, D. L. 1970 Alturism ; An examination of the concept and a review of the literature. *Psychological Bulletin,* **73**, 258-301.

Latané, B. & Darley, J. M. 1970 *The unresponsive bystander : Why doesn't he help?* New York : Appleton-Century-Crofts.

Levenson, H. 1981 Differentiating among internality, powerful others, and chance. In H. M. Lefcourt (Ed.), *Research with locus of control construct,* New York : Academic Press.

MacDonald, S. L 1966 Alturism. Cited in Krebs D. L. (1970) Alturism ; An examination of the concept and a review of the literature. *Psychological Bulletin,* **73**, 258-301.

中村陽吉 1982 援助行動の抑制因－大都市と地方都市との比較を中心として－ 東京女子大学附属比較文化研究所紀要, **43**, 65-77.

Mehrabian, A. & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality,* **40**, 525-543.

Pruitt, D. G. 1968 Reciprocity and credit building in a laboratory dyad. *Journal of Personality and Social Psychology,* **8**, 143-147.

Rival, J. E. 1963 Social character and meanings of selfishness and altruism. *Sociology and Social Research.* **47**, 311-312.

Ruthefold, E. & Mussen, P. 1968 Generosity in

nursery school boys. *Child Development,* **39**, 755-756.

Sawyer, J. 1966 The altruism scale. *American Journal of Sociology,* **71**, 407-416.

Staub, E. 1979 *Positive social behavior and morality (vol. 2).* Academic Press.

高木修　1982　順社会的行動のクラスターと行動特性　年報社会心理学, **23**, 135-156.

竹村研一　1987　パーソナリティと援助　中村陽吉・高木修(編)他者を助ける行動の心理学　光生館　Pp.84-89.

Turner,W.D. 1948 Alturism and its measurement in children. *Journal of Abnormal and Social Psychology,* **43**, 502-516.

Wilke,H. & Lanzetta,J.T. 1970 The obligation to help : The effects of amount of prior help on subsequent helping behavior. *Journal of Experimental Social Psychology,* **6**, 488-493.

—1990.9.30受稿—